



琉球大学 教授 古泉 英貴

地域医療の発展と国際的視野を持つ眼科医育成 アジア太平洋地域の眼科医療の中核を目指して

平成29年10月に、澤口昭一教授の後任として琉球大学眼科学講座の第四代教授に就任致しました。大変光栄であると同時に、重責に

身が引き締まる思いです。この原稿を執筆している時点で着任より約10か月経過しましたが、沖縄の皆さまには大変親切にしていたいただき、日々感謝の気持ちで過ごしています。目まぐるしく時間が経過していきませんが、一歩ずつ、着実に、新しい仲間と共に歩みを進めていきたく思います。

まず、診療面に関してですが、従来までの琉球大学の伝統を引き継ぎながら、私の専門である黄斑疾患・網膜硝子体疾患という新しい潮流を加え、地域医療の発展に精いっぱい貢献したいと思えます。私が着任以降、特に重視しているのが地域の先生方との緊密な病診連携です。「単なる紹介患者さんの往来だ

けでは真の意味での病診連携ではない」というのが私の持論です。大学病院が可能とする高度医療を通じて、分かりやすい診療情報のフィードバックを行ない、その結果として地域全体の眼科医療水準が向上していくようなシステムづくりを目指します。また、言うまでもなく、沖縄県は周囲を海に囲まれた島嶼県であり、関連施設との協力を行ないながら、全ての領域を県内で完結できる体制の構築を目指してまいります。

研究に関しても、今までの経験を生かし、特に実臨床につながる研究を飛躍的に発展させたいと考えています。魅力的な研究を日常的に行なえる環境整備を実施し、医局員と多くの時間を共有することでリサーチマインドの活性化を促し、まずはできるだけ多くの成体験を積んでもらいたいと思っています。そして、沖縄から世界に向けての情報発信を積極的に行なうことに注力していきます。沖縄は地理的にもアジア太平洋地域の玄関口に位置しており、国際共同研究などを通じて地域の中核となれるよう努力していきたいと思えます。

学部学生および次世代を担う眼科医の教育

は、大学教授に課せられた重要な責務の一つです。眼科医としての診療技術は当然重要ですが、常に患者さん目線に立てる心優しい眼科医を多く育てていきたいと思えます。加えて私自身の経験からも、特に若く感受性の高い時期に国際感覚を養うことは、最終的にどのような進路に進むにしても眼科医としての視野を広げ、生涯の糧になると信じています。海外学会参加や留学を積極的に推奨し、琉球大学の理念の一つでもあるグローバルリーダーを推進したいと考えています。

琉球大学医学部および附属病院は、2024年度予定の移転に向けて、さまざまなワーキンググループが理想像を描きながら鋭意準備を進めています。この移転事業は、政府が「骨太の方針」において「国際医療拠点構想」と位置付けている巨大プロジェクトに含まれるもので、今後の発展が非常に楽しみです。

私は現在45歳、まだまだ未熟で若輩者ではありますが、若さに乗じて柔軟かつ大胆に、何事にも恐れず、沖縄、日本、そして世界の眼科医療発展のために全力投球させていただく所存です。何卒末永くご指導、ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。